

「カイロ通信」第0号 (2025年3月30日記)

機内映画の感想から

日本学術振興会カイロ研究連絡センター長 長沢 栄治
(前信州イスラーム世界勉強会代表)

〔はじめに：連載に当たって〕

今年度2025年4月から日本学術振興会カイロ研究連絡センターの運営に携わるため、二年間エジプトに滞在することになりました。そのため信州イスラーム世界勉強会の代表を就任早々一年で退くことになり、新代表の三浦徹さんをはじめ、関係の皆様には大変ご迷惑をおかけしております。その償いということでもないのですが、「カイロ通信」と題して、これから不定期で滞在記を寄稿します。今回は、その最初の号。滞在以前ということで「第0号」として、搭乗した飛行機の機内サービスで観たアラブ映画について、感想などを記したいと思います。



カイロ市街地の風景

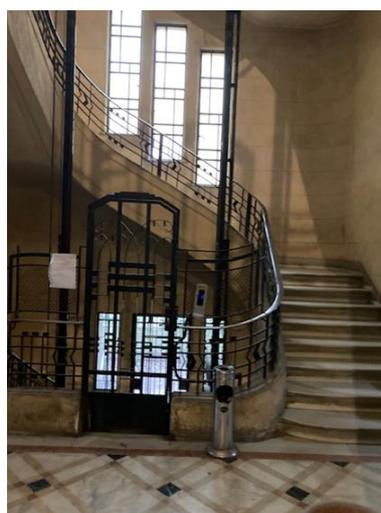
* * * * *

〔カイロ学振センター40年の歴史〕

赴任の一か月前の2月の半ば、引継ぎも兼ねて日本学術振興会カイロ研究連絡センターの設立40周年記念セミナーに参加し、エジプトとの共同研究（上智大学・岩崎えり奈さんが代表の沙漠社会の持続的発展に関する研究）について報告するため短期、カイロを訪れた。

日本学術振興会が中東イスラーム世界で現地拠点を設置したのは、今から65年前の1960年、テヘランであった。しかし、1979年イラン・イスラーム革命の余波を受けて、1981年にアンカラに移転、さらに1984年にカイロに再移転した。それから数えて40年というわけである（日本学術振興会『カイロ研究連絡センター三十周年記念』2016年1月、日本学術振興会カイロ研究連絡センター、を参照）。

カイロのナイル川の中州にある「高級住宅地区」ザマーレクに事務所を構えるに当たっては、故佐藤次高先生と故後藤明先生のご尽力があった。当初、センターは、事務所と住宅を兼ねるものだったが、前回私がセンター長を務めた 1998 年に、4 階の住居と分離して、同じ建物の 1 階に事務所を開設した。その年は前回、横浜ベイスターズが日本シリーズで優勝した年であった。それから 27 年もの月日が過ぎた。喜びもまた哀しみもあった当時のことは、またこのシリーズで書く機会もあるだろう。



カイロ学振センター点景

〔エジプト映画にがっかり〕

2 月のエジプト訪問の際には、エミレーツ航空を利用し、何本かアラブ映画を観た。最初に選んだ「キーラとエル＝ジン Keera & Jinn (kīra wa al-jinn)」(2022 年、マルワーン・ハーメド監督作品)には正直がっかりした (<https://www.imdb.com/title/tt10935956/>)。第一次世界大戦後、英国からの独立を求めた民衆運動、エジプト 1919 年革命を描いた作品であり、同時期の朝鮮の独立運動「三・一運動」との比較に関心を持っていたので期待して観たからだ。

1919 年革命は、インドの民族運動と同様、非暴力の民衆運動として知られる。また三・一運動と同じく多数の犠牲者を出した。しかし映画は、平和なデモ行進などの歴史的画像を一部に挿入しながらも、そのシーンのおそらく三分の一以上が英軍駐屯地に対する拳銃や機関銃、爆弾を使った派手な軍事作戦に充てられている。シリアスなテーマを扱いながら、娯楽作品仕立てになってしまうのは、作り手の側の責任か、観る側の要請か、それ以外の問題なのかは分からない。

革命家たちの本拠地は、カイロの中心街にある老舗のカフェレストラン、「リーシェ」(Café Riche)の地下にあったという設定。参加者のメンバーにはユダヤ教徒や上エジプト

出身のキリスト教徒女性教師などが配役されている。ここまでは評価できるが、英軍当局の策謀により、女性教師が同志の男性で主人公の一人、エル＝ギン（ジン：魔霊）というあだ名を持つ不良青年と不倫の関係にあると新聞で喧伝され、怒った兄に故郷の村で撲殺されるのは、エジプト映画「お約束」のストーリーだ。また、同志たちが運動の成功を願ってビールで乾杯するといったシーンはいかにも現実離れしている。エジプトには近年、一部で佳作の発表も続いていると聞いていたので残念である。また、この暴力賛美の映画の最後のクレジットタイトルが軍への謝辞で始まるところが、現在のエジプトの政治状況を反映している。

〔「イスラーム・ジェンダー学」的に味わい深いヨルダン映画〕

気を取り直して、ヨルダン・フランスなど5か国の合作映画「Inshallah a Boy (inshā' allāh walad)」(2023年、アムジャド・アッラシード監督作品)を観た。タイトルを邦訳すれば「もし男の子がいたら」とでもなるだろうか。カンヌ映画祭で受賞した注目映画である(https://en.wikipedia.org/wiki/Inshallah_a_Boy)。こちらは「当たり」だった。

主人公の女性、ナワール（パレスチナ人女優モナ・ハウアー演ずる）は、夫の突然死で一人娘とともに絶望の淵に落とされる。追い打ちをかけるように、夫の兄が優し気な雰囲気近づいてきて、実は弟には多額の貸した金があり、今住んでいるアパートから出て行ってもらい、所有しているピックアップトラックも譲り渡せと迫る。そして、ついに裁判沙汰になる。このあたりは法律の問題がからんで理解が難しいが、もし彼女に男児がいるなら状況は違ってくるのだ、と裁判官は言う。さらに娘の監護権の問題も持ち出され、義兄は自分が娘を引き取ると言い出す。今度はイスラーム法の専門家のシャイフに調停してもらいが、らちが明かない。切羽詰まった彼女は、妊娠証明を偽造しようとするが、それもうまくいかず、そしてついに……。やきもきする展開だが、ラストは運転技術を身につけた彼女が、何とかトラックの車庫入れに成功し、自立への道を歩み出すのではないかと、という明るい希望のシーンで終わる。

昨年度（2023年度）まで8年間、科研費の共同研究「イスラーム・ジェンダー学」の研究代表者を務めてきたこともあり、研究仲間に映画についての感想をメールで求めた。人類学者の竹村和朗さんからは「ヨルダンには、女性を相続から「排除（タハールジュ）」する家族法規定があり、それにもとづいて相続権のある女性に少額を渡して終わりにする慣行があるようだ」というコメントをもらった。

また、イスラーム法研究者の小野仁美さんからは「ヨルダン家族法がイスラーム法準拠であるならば、妻と娘には配分は少ないけれど相続権があります。ただし、息子がいなければ相続は夫の兄弟にかなり多く配分されてしまいます。今回の場合、遺産が家と車のみだったので、それらを売却して取分をよこせと迫られたようです。そして男性父系血族には子どもの後見権が引き継がれるため、かろうじて母に残る娘の監護権すら不適當である理由をつけて剥奪しようとしています。イスラーム法の規定そのもの以上に、実態は女性に不利であることが描かれているような気がします」という解説をいただいた。今後、この映

画を素材にして研究会の企画がなされるのでは、と思う。

〔映画に見る南北分断のスーダン〕

続けて選んだスーダン映画も、これまた「当たり」だった。「さようならジュリア Goodbye Julia (wadā'an jūliyā)」(2023年、ムハンマド・コルドファーニー監督作品)である。アカデミー賞国際映画部門で受賞候補作となるなど、おそらくスーダン映画史上、最高傑作の一つに数えられる作品のようだ (https://en.wikipedia.org/wiki/Goodbye_Julia)。

元歌手で不慣れな家事にうんざりしていた主人公の女性、モナ(イーマーン・ユースフ)は、ハルツーム市内をドライブ中、南部出身の避難民キャンプで男の子をひき逃げしてしまう。怒った父親がバイクに乗って追いかけてきたところ、恐怖にかられた彼女の夫が銃で撃ち殺す。その後、罪の意識にかられたモナは、男の子とその母親、ジュリア(シーラーン・リヤーク)を事件のことを明かさないうまま引き取り、それぞれ教育の道へと導く。親子二人は何も知らないままだと思っていたが……。そして、やがて別れの日が訪れる。それは2011年7月9日の南部スーダンの分離独立の日であった。ジュリア親子を乗せた船が岸から離れ行くとき、モナが歌う別れの歌「ゲール・リー・ケイフ(どうしてなのか私に何か話して)」が胸を打つ (<https://www.youtube.com/watch?v=wcAKtZFexB8>)。とくに「貴女なしでは私は生きていけないが、貴女は私と一緒に生きてはいけない」という歌詞が切ない。

スーダン史研究者の栗田禎子さんから、映画について以下のコメントを送っていただいた。「この映画は2011年の「南スーダン」分離独立前後を扱っているようですが、現在はその当時に比べても情勢が段違いに深刻化してしまった、ことを映画のプロットを見ながら改めて痛感し、暗澹たる気持ちになります。当時はまだ「北」の「南」に対する人種差別、迫害の歴史等をどう克服するかが最大の課題だったわけですが、現在は「北」の支配層内部の「内戦」という状況になってしまい、(かつての「南部」やヌバ山地等の)低開発諸地域は、むしろ啞然として、首都ハルツーム自体が内戦の舞台と化しているような現状を見ている、という感じですので。「周辺」化(あるいは「中心」=「周辺」関係)の生み出した矛盾が、いまでは「中心」そのものに持ち込まれて爆発している、ような局面だと思います。「第三世界」の問題を考える人たちには、とくに含蓄が深いコメントである。

このコメントに出てくるヌバ山地出身の人たちに、私は1980年代、2回にわたるスーダン滞在の際、大変お世話になった。歌を聞いて感極まったのは、背が高くスタイルの良いジュリア役の女優さんにヌバの女性たちの面影を重ねたからでもあった(拙稿「ナイルをさかのぼるーオムドルマンで会った人々」一橋大学地中海研究会『地中海という広場』淡交社1998年)。当時、少女であった彼女たちは、その後、はたして内戦の荒波の中をどのように生き抜いたのだろうか。

〔ふたたびエジプト映画にがっかりするが、パレスチナ映画に救われる〕

3月末に2年間の赴任のために乗ったカタール航空でも機内映画サービスを利用した。

エミレーツ航空ほどサービス内容（本数）は充実しておらず、そのせいでもないと思うのだが、エジプト映画にはふたたびがっかりした。「アル＝ゼロ」（2023年、ムハンマド・ガマール・アル＝アドル監督作品）である（<https://www.imdb.com/title/tt2837441/>）。内容は、マッチョ俳優ムハンマド・ラドワーンが演ずる主人公が、難病にかかった一人息子を助けるため、臓器売買の怪しい世界に入り込んでいく、という触れ込みだった。シリアスな問題を扱うのかと期待したが、あまりにもシナリオが薄っぺらで、演出も軽妙というよりは軽薄。我慢しきれずに観るのを途中で止めた。

カイロへの到着時間がぎりぎりだったが、次にパレスチナ映画「教師 The Teacher (al-ustādh)」（2023年、ファルハーン・ナブルーシー^{かんとく}監督作品）を観終えることができた

（<https://www.imdb.com/title/tt21941532/>;

[https://en.wikipedia.org/wiki/The_Teacher_\(2023_film\)](https://en.wikipedia.org/wiki/The_Teacher_(2023_film))）。2023年10月7日以前の制作と思われるが、今回のガザの問題を考える上で参考になる内容だった。舞台は分離壁近くの、イスラエル人入植者の暴力にさらされている西岸の村。主演は「ジェニン、ジェニン」（2002年、https://en.wikipedia.org/wiki/Jenin,_Jenin）の監督などで知られるムハンマド・バクリーの息子、サラハ・バクリー。彼が演じたのは、息子がデモに参加して拘束され、獄中で凍え死んだ過去を持つ父親、という難しい役だった。息子の死に今も苦しむ主人公の英語教師は、その代わりを求めるように一人の生徒に眼をかける。しかし、その彼に自身の重大な秘密を知られてしまう。秘密とはイスラエル兵の拉致監禁であった。映画の重要な話の軸は、親子の感情的結びつき（人質の家族を含めて）にあるが、それと交錯するもう一つの軸が人質交換の問題である。

現在も続くガザの停戦交渉において最大の焦点となっているのが、この人質交換の問題である。映画では、イスラエル兵一人の人質に対し、パレスチナ「政治囚」千人の交換が語られる。これに関連して最近、注目されているのが、イスラエル国防軍の「ハンニバル指令（Hannibal Directive）」という戦闘時の方針である（カルタゴの将軍、ハンニバルが捕虜になるのを恥じて自害した故事に由来して命名）。それは「人質に取られないためにはいかなる手段も辞さない」、つまり人質になりそうな兵士の犠牲を厭わないという文書化されていない指令である。導入されたのはレバノン侵攻が続いていた1986年であり、今回の「戦争」でも適用されている疑いがある（https://en.wikipedia.org/wiki/Hannibal_Directive）。

命は決して数の問題であってはならない。しかし、その命の尊厳を顧みることなく、たんなる数の問題に収斂させようとしているのが、ガザ、パレスチナ、そしてイスラエルで起きている非人間的な状況である。

【謝辞】本稿の執筆に当たっては竹村和朗様、小野仁美様、栗田禎子様コメントの引用などで大変お世話になりました。記して謝意を表します。筆者。